よろの祈り

自閉症とたたかう母の記録

押尾玲子

講談社

NDC 914　19.4cm

あすなろの祈り

定価　四九〇円

昭和45年10月8日　第1刷発行

著者　押尾玲子

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号112
電話東京(943)5111(大代表)
振替口座東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　株式会社国宝社

★落丁本・乱丁本はおとりかえします

© REIKO OSHIO 1970　PRINTED IN JAPAN

0095-166610-2253 (0)　(学2)

はじめに

わが子が自閉症と知らされてから、私は思いがけない多くの経験をいたしました。嘆き悲しみ、初めて真剣に死と対決したこともありました。勇気があったのかなかったのか、幸いその時期も通り抜けましたが、死がけっして遠いものでないことも、身をもって知りました。

決め手となる対策もないまま、何をしたらよいのか戸惑いうろたえ、手探りできょうまで辿ってまいりました。その間、周囲にも恵まれ、特に「あすなろ学園」の三年間にわたる治療教育は、時期的によかったことも加えて、子どもに希望の灯を燈すことができました。

自閉症に対する関心も理解も、子どもの発病時に比べると、かなり深まったように思いますが、まだまだ病名すら知らない人のほうが、ずっと多いことでしょう。そしてまた、現実にこのような子を抱いて苦しんでいる人は、どうしてよいのか相変わらず悶え悩んでおります。それも並みたいていなものではなく、同じ道を通った親でなければわからない苦悩が、いつ果てるともなく毎日毎日続くのです。

苦しみを分かちあう友を求め、子どもをよくしたいと願う親が集まり、各地に親の会が生まれました。

私の住む岐阜県にも、数名の同志の呼びかけで、昭和四十四年八月、「岐阜県自閉症児親の会」

が誕生しました。親同士、慰め励まし合う場所から、子どもの幸せの道を求めて、世間一般の理解と為政者の協力を促そうと、力強く働きかけております。

子どもが「あすなろ学園」に入園中、私は勤務と家事の合い間を縫って、おりにふれ書き綴ってきました。手離した淋しさと「あすなろ学園」への距離を、書くことによって子どもと接近していたいと思ったのです。それと同時に、巻き込まれた渦から出て冷静に自分をふり返り子どもを眺めることもできました。そして何よりも、体は忙しくとも、心に余裕を持つことができたからでしょう。

だれに見せようと思って書き綴ったわけではありませんが、たまたま各地の「親の会」で発行している文集、『あすなろ』『つぼみ』などに私も加えさせていただきました。

親の声が同じ運命の親同士の、心強い励ましとも助言ともなっているとき、私も今まで書いたものをまとめてみたい気持ちに駆られました。

実際、あちこちで聞く親の声は、私がこれまで通ってきたそのままの姿であり叫びです。苦しみも悩みも、そして願うこともみな同じです。私自身も、現在も今後も、子どもの成長とともに悩みの形こそ変わってきますが、壁にぶつかっては悩み、二歩進んで一歩退がり、といったことを繰り返していくでしょう。

これまでの経験が、同じ思いのご両親の共感を得、少しでも役立ったら、また、一般の人の理解を多少とも深めることができたら、ほんとうに嬉しいことだと思います。

おりおりに書いたものを集めたことと、特に印象に残る思い出や、強く訴えたいことを強調し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

たため、一、二、内容が重複し、読みにくいところがあるかもしれません。どうかご了承ください。

もし将来、子どもがこれを読んで理解してくれるときがきたら、母親としてもう何もいうことはないでしょう。

昭和四十五年九月

押尾玲子

目　次

はじめに

Ⅰ　死への誘い……七

あすなろの木のように　9

追　想　20

Ⅱ　枕を濡らした夜……二七

ねえちゃんとボク　29

太陽と自転車　40

二つの出発　48

メリーとニャン子　59

Ⅲ　孤独なたたかい……五五

言葉のあゆみ　77

孤独なたたかい　91
いとしごへの手紙　99
授業参観の思い出　111

Ⅳ　必死の願い……一三三
教育への道（その一）　125
教育への道（その二）　167
教育への道（その三）　212
道を求めて　230

Ⅴ　試練を越えて……二四一
生いたちの記　243
押尾くんの治療者から（十亀史郎）　264
すみやかに治療と教育の場を　273

あとがき――善意の人びと　286

装丁・風間完
写真・著者

I

死への誘い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

あすなろの木のように

抱きしめながら　学園の玄関に急ぎ、息を整えてブザーを押す。鍵を持った保母さんの後ろから、バタバタと子どもの足音も聞こえる。「ガチャリ」扉が開くと、二、三人の子どもたちの顔が覗かれる。

「だれの面会だろう」

という、待ちかねた顔、顔、顔である。

「ママアー」

と飛びついてくる子どもを、しっかりと抱きしめてやりながら、久しぶりの面会に思わず目がうるんでくる。

自閉症という、それまで聞いたこともなかった病気の子だと知らされてから、きょうまで四年間、その間に私は、もっともっと長い年月を経験したように思う。

最愛のわが子が普通の子でないと知ったときの驚愕！　信じられない非情な現実にうろたえながらも、なんとしてでも治さねばと、子どもの手を引き児童相談所を訪れ、病院を巡り歩き、あげくの果てには新聞社にまで訪ね、どこかでだれかが治してくださるに違いないと、必死に捜し求めた心の旅路！　その期待も空しく、やがてこの病気がきわめて稀な、しかも非常に難しい病気であり、現在の医学では原因も、そしてなんらの決定的な治療法もないことを知らされたときの

絶望！　真剣に死を思い、なぜ自分だけがこんな不幸に遭遇しなければならなかったのかと、この世を呪った暗黒の日々。身悶えしながらも、どこからか一縷の光明を見いだそうとしたあがき。そのなかでようやく辿りついた最後まで希望を捨てず、この不幸な子の幸せを見つけなければならないという親としての目覚め。この四年間、子どもは私に多くのことを教え、経験させてくれた。それはこれからもずっと続けられていくことであろう。どのような成長を辿るか、希望を持って見守っていかねばと思っている。

思い当たること

私たちが子どもの成長に、一抹の不安と疑惑を抱いたのは二歳前後のころであったろうか。心身ともに健やかな成長を見せていた乳児期。これといった心配もなく、むしろ手のかからぬ育てよい子であったと思う。最初に首を傾げたのは、長女に比べあまりにも口が遅いことであった。二歳過ぎてもほんの片言しかしゃべらない。また、徐々に芽生えてくる聞きわけがまったくできないこと。友だちを求めない、というより全然無関心なこと。最も身近な母親の私に対しても、長女のような甘えを見せないこと……等々、振り返ってみれば細かい例はいくつも思い当たる。

不審に思いながらも、そのうちには変わってくるだろうと時期を待ち、三歳を迎えたが、子どもの状態はいっこうに変化を見せなかった。もしや、何か精神的発達に欠陥があるのではないか？　との不安が、私の頭をよぎることもあったが、残念なことに私はそのような知識に欠けていた。というよりも、すべての母親が信じているように、まさか自分の子が異常児であろうなど、夢にも思っていなかったのである。精神の発育の異常といえば、わずかに精神薄弱より知ら

なかったのである。

不安を抱き始めてから私は、何かこのような子のことを書いた本はないかと捜し求めた。どこにも見当たらぬままに、精薄児に関する本を読み漁った。子どもに思い当たる点もまったくないではなかったが、一方親の欲目も手伝ってか、明らかにそれと違う知能面を見せたのである。文字や数字に対する異常なまでの関心、教えもしないのに文字を覚え、数字を誦んじ、自分の都合のよいことに関しては、結構記憶と知恵を働かせていたのである。しかし、日常のすべての行動は、あまりにも極端な自己本位であった。正常児でも幼児期は自己本位であり、そこに外部からの働きかけ、いわゆる躾が加えられて、人格が成長していくのが課程であるが、子どもには外部からの働きかけが少しも効を奏さなかった。子どもの心は外部から遮断されているとしか思えなかった。自分がしたいと思えば、だれが迷惑しようが叱られようが、しなければやまない。行きたいと思えば、あてもなく飛び出してしまう。その世話の難しさ、扱い難さは、とうていこのような子を持った親でなければわかるものではないであろう。親は何をしていても、片時も目を離すことも、気を許すこともできない。それがすぐ危険に結びつくからである。普通の子でも交通事故の多い現在、周囲を意識しない子が一人で飛び出すことは、どんなに危いことであろうか。外部と接触を閉じた子どもにとって、自分が進む道を遮る存在などあるはずがなかった。走っている車が止まるべきで自分が車の過ぎるのを待つべきではなかったのである。

家に閉じ籠れば、一人で自分の興味を持った不可解なことのみに耽り、母親の働きかけさえ受けいれない。飽きれば黙って外へ出てしまう。ぴったりと寄り添っている私ですら、どのように

相手をしたらよいのか、まったく途方にくれるありさまであった。

不安と疑惑は日増しに濃くなったものの、親バカの例に洩れず、難しい漢字を読み、数字を数え、文字に対する異常な執着をする子に、天才児ではないかとすら考えたこともあった。

泣き疲れた私の胸に

やがて四歳を迎え、当然のこととして幼稚園の話が出るようになると、さすがに私たちも、このままではおけないと切実に悩みはじめた。

一度専門医に相談したいと思いながらも何となく気遅れがしたのは、まさかと思う欲目のほかに、もし異常だと診断されたらと思う親の恐れが多分にあった。無意識のうちにそれを避けていたのであろう。これは親として誠に怠慢だった。知的な芽生えに惑わされ、自己判断して、あたら二年間を空白に過ごしたのである。不幸はだれを襲うかもしれぬ。疑問を持ったらすぐ専門家に相談する。それが無駄なら幸いだ。どんな病気でも早期発見、早期治療に越したことはない。

子どもを幼稚園に入れなければならない。だがこのような状態ではたして行けるだろうか。どう考えても無理であった。しかし、まったく友だちを求めぬ子だけに、なおさら子どもの中へ入れる必要があるのではないかとも思い、また友だちと交わったら多少は変わってくるかもしれないという虫のよい期待も抱き、知り合いの保母さんによく相談し、ともかく入れてみたいとお願いしたのである。

どうにかして友だちの中に溶け込んで欲しい。祈るような切ない願いもわずか三日余り、子どもは保母さんが目を離したわずかな隙に園を飛び出し、おりからの雨の中を当てもなく飛び出し迷子になってしまったのであった。

そのときの私たちの驚きと不安はいかばかりであったろう。やはり無理だった！　都合のよい期待ばかり考えていたのはなんと勝手なことだったろう。もう子どもは帰って来ないのではないか！　烈しい後悔が私を襲い、自責の念が私を苦しめ、半狂乱になった。幸いにも子どもは無事保護されて数時間後に私の手に戻ったものの、この苛烈な交通網をかなりの遠方まで、事故もなく歩いたのがふしぎですらあった。泣き疲れ放心状態の私の手に帰った子どもは、何があったかもまるで知らぬ表情で、ずぶ濡れの衣服を取り替える間ももどかし気に、興味を持っていた新聞の番組の文字に喰い入ったのである。普通の子どもならば、母親に取り縋って泣きじゃくるであろうに……。

子どもはその日かぎり園を断わられた。私たちのほうからも当然辞退せざるを得なかった。

真実を求めて放浪　この事件は、私たちに大きな契機をもたらした。真実を追求せねばならぬ。恐れていた不安に、真正面からぶつかっていかねばならぬ。たとえそれが、どんなに恐ろしい宣告であったにもせよ、と……。

それから私は、子どもの手を引き、その真実を求めて長い心の放浪を始めたのである。

最初に訪ねたのは児童相談所であった。子どもの勝手な行動は知能テストにもかからなかったが、それでも専門家の目は、精薄児とは思えないと判断された。しかし、明らかに正常児と異なる行動に、専門医の診察を受けるようにと精神科医へ紹介状を書いてくださった。

不安な気持ちで初めて精神科の門を潜った。間違った認識であろうが、私たちも精神科とはおよそ縁のない存在だと思っていた。それだけに勇気のいることであったし、人にも隠していた。

だが、もうそんなことはいっておられない。何としても、まず真実を知らねばならぬ気持ちが、私の恥ずかしさ（これはけっして恥ずべきことではないが）をかなぐり捨てさせていた。

医師は子どもの出生からこれまでの成長を詳しく尋ねられ、私は正直に答えた。脳波の測定も異常はなかった。ここでも精薄児ではないと診断されたが、それ以上はわからなかった。私たちの考えでは、専門医の診察を受けたらすぐ病名もわかり治療法も見つかると思っていたのだが、表に見えない心の病気だけに、いかなる権威の医師であろうと早急に判断できる性質のものではなかったのであろう。カルテには行動異常児と記入され、週一度通院することとなった。医師は治療と並んで、子どもを観察する必要があったのであろう。そして通院のたびに、親の過保護と躾を厳しく指摘された。私には納得できなかった。過保護にならざるを得ないこと、躾の効を奏さないことを何度も訴えた。それだけの問題でないことを、医学に無知でも親の実感として身に沁みていたのである。それよりも早急に子どもの真実を知りたかった。もっと打つべき何らかの方法を見つけて欲しかった。時が無為に流れて行くような気がした。一人で悶々と泣いていることはあまりにも辛かった。

肩にくい込む重味

子どもをもう一度、仲間に入れよう。幼稚園が無理なら精薄の施設でも孤立しているよりましであろう。団体生活への足掛かりともなるかもしれない。

再び児童相談所を訪れてそのことを願った。賛成はされなかったが、私のたっての願いに紹介状を認められた。それを持って、その足で子どもといっしょに施設を訪ねた。かなりの道のりを車も拾えず、通りすがりの人に道を尋ねながらトボトボと歩いた。歩き疲れた子を背にした

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.